



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会



第60回日本手外科学会を終えて

第60回日本手外科学会学術集会会長
平田 仁



目次

- 第60回日本手外科学会を終えて
- 日本手外科学会名誉会員に推挙されて
- 日本手外科学会特別会員に推挙されて
- JSSH-HKSSH Exchange Traveling Fellow報告記
- 手外科温故知新
- 第9回手外科医のリスクマネジメント
- バトンリレー(第1回)
- 第27回手外科医親睦テニス大会
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

第60回日本手外科学会を本年4月27日、28日の両日名古屋市国際会議場で開催させて頂きました。本学会を名古屋大学が担当するのは今回が4回目であり、また、名古屋大学に手外科学講座が開講されて以降でも2回目となり、大変光栄なことであり、手外科学会会員の皆様のご厚情に深く感謝申し上げます。

沖縄で開催された第57回日本手外科学会で会長にご指名いただいて以来約3年をかけて教室をあげて準備を進めて参りました。日本手外科学会は設立から60年、人であれば還暦を迎え既に成熟期に入った感がありました。手外科の分野ではEBMや費用対効果の解析、或いは治療技術の伝承といった話題が多くなり、従来多くを占めた革新的治療技術の探索といった話題はすっかり鳴りを潜めています。いつの間にか基礎研究分野のセッションも隅へと追いやられ、セッションを組むことも儘ならないほど応募自体も減ってきています。私はこんな日本手外科学会の状況を多少憂慮していました。学会の更なる発展には進取の機運に富む若手が野心を持って活躍する場が必要であり、彼らにEBMに捉われずチャレンジ精神に満ちた研究発表をさせる機会を用意することが大切だと考えていました。そこで、学会のテーマを取って“新たなフロンティアへの挑戦”とし、若手研究者に少しでも多くのチャンスを与えることに注力することと致しました。幸い私どもは名古屋大学手外科出身者と、東海地区のハンドセラピストの先生がたが協力してハンドフロンティアというNPO法人を12年前に設立し月例で研究会を開催していましたので、皆さんに私の思いを伝え、共に知恵を出し合って3年をかけて企画を立ててきました。

今回の学会では従来になく全く新しい企画を沢山用意しました。日本を代表するハンドセンターが指導医、専攻医、ハンドセラピストでチームを構成し、争点のある話題を徹底討論するteam debateや、展示会場で企業の研究者にも参加してもらい主に若手研究者がリードして聴衆も交えた公開討論を行うround tableなど、個性的で斬新な企画がハンドフロンティアでの討論を通じて生まれました。初めての試みでありイメージが湧かず会員が応募を躊躇するのではないかとの不安もあり、2年前にはハンドフロンティアのメンバーが出演してイメージビデオを作成し、第59回大会では展示会場にブースを設置しビデオを繰り返し上映してプロモーションに努めました。他にも従来になく企画として40代までの会員を演者に指名して開催するYoung Leaders Symposiumを設定しましたが、ここでは準備委員会が指名した座長に企画からシンポジストの人選まで全てお任せいたしました。教育研修講演も意識的に50歳以下の会員を指名し、30名の講師に15のテーマでEBMに基づいて講演をしていただきました。

若手を積極的に登用することと並行して、60回という節目での開催であることを意識し、これまで日本手外科学会を牽引されてきた多くのシニア会員の先生がたにご無理をお願いして学会の足跡を振り返る企画も用意致しました。学会前日には代議員会懇親会の場で歴代理事長にご登壇いただき、これまでの60年を総括していただいた上で、会場の先生がたからも多くの思い出深い話題を提供していただきました。学会初日の夕方には山内裕雄先生と中村蓼吾先生にご登壇いただき日本手外科学会60周年記念講演会を催しましたが、あまりにも素晴らしい講演であったので是非全ての会員にお届けしたいと思い、その晩のうちにビデオに編集し、大会2日目にも展示会場で繰り返し放映させて頂きました。

今回の学術集会にはこれまでで最大となる2,167名もの方に参加していただき盛会裡に終わることができました。8月末の理事会で開催報告を終えてやっと肩の荷がおり、徐々に緊張もほぐれて参りました。生活の落ち着きを取り戻す中で改めてご支援をいただいた多くの先生がたへの感謝の思いが強くなっています。最後に日本手外科学会の益々の発展を祈念させて頂き開催報告を結ばせていただきます。本当にありがとうございました。

新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

広島県障害者リハビリテーションセンター 水 関 隆 也



この度は日本手外科学会名誉会員にご承認いただき誠にありがとうございました。身に余る光栄に存じます。去年度第59回日本手外科学会学術集会を主催させていただいたばかりですが、はや1年が過ぎてしまいました。歳のせいでしょうか、時の経つのが異常に早く感じられます。それでも最近管理職の雑事からも解放され、やっと身の回りのこと、自分の過去を振り返る時間が持てるようになりました。

私の手外科との出会いは1978年の広島大学医学部の整形外科の臨床講義の時に始まります。当時主任教授でおられた津下健哉先生は黒板に指のシェーマをサラサラと描き、指運動のメカニズムを淡々と解説されました。今まで気にも留めなかった指の動きも本当は複雑に制御された動きであることを知り、手指解剖の奥深さに触れるところとなりました。これがきっかけで整形外科教室へ入局することを決心しました。1986年10月より生田教授の命により、津下名誉教授のお手伝いをするべく広島県障害者リハビリテーションセンターに赴任いたしました。津下先生がご在職の最初の10年間は津下先生の僕として、手術のプランニング、お手伝いから、術後のリハビリまで担当させていただきました。この間に津下先生の手の外科学に関する知識、技術をできる限り盗まさせていただきましたが、これのみならず津下先生の医師として、人としてのあり様に触れ、何歳になっても学究心を失わないこと、人間として謙虚であることの大切さを学びました。私の主催する日手会学術集会中の不慮の事故のためお亡くなりになり、津下先生に直接恩返しをすることは叶わなくなりましたが、学会の発展のための協力を惜しまないことが恩返しの道と心しております。

私が勤務してきた職場は、施設の性格上、関節リウマチ、関節症、神経麻痺等、慢性疾患を扱うことが多く、特にリウマチ患者との出会いは私の医師としての人生を決定づけました。生物学的製剤が導入される前の手のリウマチ病変は多くの場合進行性で、手術の限界をわきまえること、適応を厳格に判断することの大切さを学びました。そして何より永い間のフォローが必要であることを学びました。

私は平成7年に日本手外科学会評議員に選出されて以来、積極的に学会運営のお手伝いをさせていただいて参りました。今となっては懐かしい思い出ばかりです。他大学の同世代の先生と育んだ友情、先達の師からの鞭撻、後輩先生との交流も私にとって代えがたい財産です。学閥を超えた人的交流、自由に意見交換が行える雰囲気、学会として事業を開催する時の結束力、等々は日手会が他学会に誇るべき伝統であろうと思います。これから続く次世代の先生方には、この伝統を更に発展、昇華させていただきたいと思います。

今しばらくは現役手外科医を続けるつもりですが、引き際をわきまえて患者さまの診療、後進の指導にあたりたいと思います。日手会のさらなる発展を祈念してお礼のご挨拶といたします。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会特別会員に推挙されて

広島大学付属病院国際リンパ浮腫治療センター 光 嶋 勲



日本手外科学会特別会員にご推挙いただき、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。私は1980年頃から本学会において神経筋の実験研究、遊離穿通枝皮弁、部分趾移植、などの発表を行ってきました。80年代は、形成外科会員は極めて少なく、手外科の有用性を形成外科領域に広めるべきである事を痛感していました。三浪・佐々木両理事長時代に理事として働かせていただき、形成外科と従来の手外科の融合にこそ今後の世界への飛躍があると信じ続けております。

手の基礎医学と臨床医学の融合

私は1977年に東大形成外科に入局し、微小血管吻合術を学び、1980年頃から新しい血管柄付き神経移植術の神経再生の研究に着手し、従来の神経移植に比べ再生能力が優れていることを知りました。これがきっかけで神経再生に興味を持ち、ラジオアイソトープを用いたin vivoの軸索内輸送のフルオログラフィー技術を学び、神経移植後の軸索内細胞骨格の動態に関して研究しました。1983年筑波大学形成外科異動後は、筋移植を超微細構造、構造タンパク、電気生理などで検索し、変性と再生の過程があることを発見しました。1990年から川崎医大に移り、ヒトの神経筋やパチニ小体の研究、リンパ浮腫例におけるリンパ管平滑筋細胞の再生などを見出し、新しいリンパ再建術の開発につながりました。基礎研究の知見と高度の臨床手技(超微小外科)がリンクすれば多くの新しい手術手技が開発でき、それらを世界に発信できることを学びました。代表的なものとして、血管柄付き神経移植、穿通枝皮弁、神経束移行術、リンパ管の機能再建術などが挙げられます。

穿通枝皮弁・超微小外科の開発・啓蒙

1985年頃、0.5mm前後の微小血管1本で筋肉を含めずとも大きな皮弁(穿通枝皮弁、perforator flap)が生着することを世界に先駆けて報告しました。その後32年間、各種の穿通枝皮弁を発信し続けております。1997年から現在まで20年間にわたり、毎年海外で国際講習会とライブ手術を行ってきました(22カ国32施設)。東大時代の海外見学者は300名で、国際講習会で3000名以上の海外の外科医がこの術式を学んでいます。

手の予防的外科治療の開発

超微小外科の進歩によって早期例であれば、リンパ浮腫の予防が可能となりました。また早期に神経バイパス手術を行えば、神経が損傷されても直ちに回復することがわかり、ヒトの解剖を人工的に変える予防的超微小外科手術や外科的免疫療法が確立されつつあります。2017年4月より広島大学病院国際リンパ浮腫治療センター設立を依頼され、内外の患者さんの治療と内外の超微小外科医の育成を依頼されております。さらに2017年6月より世界マイクロ学会理事長に就任しました。今後は各国に微小手外科学会を設立し、特に発展途上国に微小外科の技術を普及させるため若い専門家の育成に全力で努力したいと思います。

JSSH-HKSSH Exchange Traveling Fellow 報告記

上 村 卓 也

大阪市立大学大学院医学研究科 整形外科

はじめに

このたび平成29年度JSSH-HKSSH Exchange Traveling Fellowに選出され、香港で研修をさせていただきました。平成29年3月22日から31日までの期間で、香港手外科学会、病院見学、カダバーワークショップに参加し、海外の手外科医療を直に学ぶことができました。また、晩餐会では連日もてなしを受け、国際的に著名な先生方と楽しく話をすることもできました。これらは紙面では書ききれないぐらい非常に充実した研修内容であり、貴重な経験の機会を与えて下さった日本手外科学会および香港手外科学会に対して心より御礼申し上げます。

Hand and Wrist Cadaveric Workshop

学会の前日(3月24日)にPrince of Wales Hospitalに併設されているOrthopaedic Learning Centreで行われました。ここでは毎年、手関節鏡などのカダバーワークショップが行われており(日手会からも紹介案内がなされています)、参加された日本の先生方も多いかと思えます。今回はFracture Fixation & Surgical Approachesがテーマであり、新鮮遺体を用いて2人1組で手術を行いました。なかでも実際にHemihamate arthroplastyの手術を行い、有鉤骨の採取方法などのピットフォールを学ぶことができたので、大変有意義なワークショップでした。

HKSSH 30th Annual Congress 2017

3月25日・26日の2日間、Princess Margaret Hospitalで第30回香港手外科学会が行われました。本学会は毎年テーマが設定されており、今回のテーマはThe Battle against Upper Limb Stiffnessでした。香港を代表する手外科の先生方をはじめ、招待演者(今回はロシア手外科学会が招待されていました)の先生も含めて活発な討論がなされていました。特に、同世代の先生が座長や学会の中心役員として活躍されており、大きな刺激を受けました。私は、iPS細胞と人工神経を用いた末梢神経再生の発表を行いました。基礎研究の内容にもかかわらず興味を持っていただき、多数の質問やsuggestionをいただけたので大変うれしく思いました。

病院見学

上記以外の日は、病院で手術見学を行いました。香港の1000床以上の基幹病院すべてを訪問でき、各病院の手外科リーダーの手術を見学できました。特にPC Ho先生の手術は、各国からの研修者も多数いて熱気にあふれていました(写真)。手関節鏡(局所麻酔下での手関節鏡手術はインパクトがありました)や先天奇形などの手術について、スライドも交えてポイントを丁寧に教えていただきました。Ho先生のリーダーシップと真摯な人柄に深い感銘を受けました。他の基幹病院では、こちらも同世代の先生が手外科リーダーとして治療(手術)にあたっている姿を見ることができ、とても良い刺激となりました。香港は女性手外科医が多く、整形外科に限らず女性の外科医は決してめずらしくはないとのこと(香港の医学部学生も半数以上が女性)でした。これは、手術を含めすべての日常勤務が17時には終了するように設定されているためです。そのため香港の先生方は趣味も多彩で、いろいろ楽しい話を聞くことができました(例えばHo先生はハーモニカ演奏もスペシャリストで、有名歌手と大舞台で演奏されていました)。また、すべての基幹病院の電子カルテは連携しており、どの病院からでも患者データにアクセスでき、容易に情報収集可能なところは非常に効率的で有用だと感じました。このように日本と海外における医療文化の様々な違いも体験することができました。

病院訪問は、Ho Jun Cheon先生(韓国手外科学会のAmbassador)と織田宏基先生(HKSSH Asia-Pacific Ambassador)とともに行動しました。香港だけでなく韓国の手外科医療についても話を聞くことができ、短期滞在ではありましたが非常に親密になりました。

見学中にHo先生から30分のレクチャーを依頼されましたので、スタッフ数十人の前で橈骨動脈穿通枝脂肪弁に関する講演を行いました(ポスター写真)。英語での発表準備は苦労しましたが、講演後にHo先生から労いの言葉とFeedbackをいただけたので、こちらも貴重な経験となりました。



学会場にて(左:HKSSH PresidentのPT Chan先生、中央:筆者、右:Prof. Alexander Zolotov)



訪問を共にしたAmbassadors(左から織田宏基先生、筆者、PC Ho先生、Ho Jun Cheon先生)

おわりに

滞在中、香港手外科学会の先生方(特にPresidentのPT Chan先生)には非常に丁寧に扱っていただき、大変お世話になりました(写真)。これも今までに培われたJSSHとHKSSHの友好関係に基づくものと実感し、諸先輩方に心から感謝いたします。

また推薦していただいた大阪市立大学整形外科の中村博亮教授と香月憲一先生、選出いただいた日本手外科学会理事長の矢島弘嗣先生、国際委員会担当理事の柿木良介先生と委員長の和田卓郎先生に厚く御礼申し上げます。また、長期出張にも関わらず快く送り出して下さった大阪市立大学整形外科手外科班の先生方、Traveling Fellowに関して過去の経験やアドバイスを教えて下さった同門の安田匡孝先生と恵木丈先生、田中祥貴先生に感謝いたします。この実りあるTraveling Fellowのプログラムは、今後もぜひ継続していただきたいと思います。



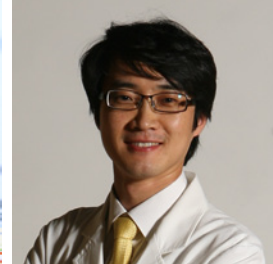
手術風景(中央のHo先生と見学の先生ら)



Hand Team (Tuen Mun Hospital) との晚餐会



Takuya UEMURA M.D., Ph.D.
Department of Orthopaedic Surgery,
Osaka City University Graduate School of Medicine
Osaka, Japan



Ho-Jun CHEON M.D.
W Hospital
Institute for Hand Reconstructive Microsurgery
Daegu, Korea

International Young Hand Surgeons Lecture

Wednesday, 22 March 2017 6:00-7:00pm

Seminar Room, Orthopaedic Learning Centre, 1/F, LKS Specialist Clinics North Wing,
Prince of Wales Hospital

Perforator adiposal flaps for coverage of the scarred peripheral nerves

~Takuya UEMURA M.D., Ph.D.~

Arthroscopic treatment of TFCC foveal tear

~Ho-Jun CHEON M.D.~

レクチャーのポスター

手外科温故知新： 手根靭帯断裂と手根不安定症への挑戦は続く

上 羽 康 夫

京都大学医短部名誉教授

手関節は8個の手根骨から成り、広い運動域を持つばかりでなく握力の集中する部位でもあり、手の機能にとって極めて重要である。ここには手根骨を連結する数多くの靭帯が存在する。これらの靭帯は小さいけれども手の運動にとって重要な役割を果たしている。大関節内にある小靭帯は断裂しても通常は機能障害を残すことなく治癒するが、手関節では僅か数ミリメートルの小靭帯の断裂であっても治療後に重篤な後遺症を生ずる可能性がある。豆状骨を除けば、手根骨には筋腱は停止せず常に靭帯を介して伝わってくる外力によって受動的に動く。したがって、手関節では小さな靭帯でも隣接する手根骨運動に大きな影響をあたえる。手根靭帯断裂を放置すれば、手根骨の相互関係は崩れ、手根不安定症 (carpal instability) が発生する。

人類が手で道具を使い始めた時から手根靭帯断裂は生じただろう。古代人は斧や弓矢を使い、有史時代の人々は鍬や櫓を激しく使っていたから、手根靭帯断裂による手の痛みに悩んでいた多くの狩人や農夫が居たに違いない。20世紀に入っても、X線像に骨折が認められなければ、捻挫として長期間の保存的治療を行っていた。その中に手根部痛を訴え続ける患者たちが居た。Mayo ClinicのLinscheid & Dobynsらは手関節X線像を詳細に調査し、手根靭帯断裂後に手根骨配列異常が生じることに気づいた。1971年彼らはアメリカ手外科学会にて発表し、翌年J. Bone Joint Surg.54-Aに掲載した¹⁾。彼らは外傷性手根不安定症 (traumatic carpal instability) と呼んで注意を促したが、手根靭帯の特殊性を十分に理解できなかった当時の外科医たちはその意義を十分に理解できず、従来の捻挫に対する治療法を踏襲し続け、手根不安定症を皮肉まじりに“Mayo’s disease”と呼んでいた。1981年に私はMayo Clinic Biomechanics LabのProf. ES Chaoのもとで半年間biomechanicsを学ぶ機会を得た。その期間中は毎週1回開催される手外科グループの症例検討会に出席した。検討会は早朝6時半から約1時間開催され、Dobyns JH、Linscheid RL、Cooney WP、Wood MBなど錚々たる手外科医と10人ほどのレジデントやハンドセラピストが参加した(図1)。毎週約10症例の検討がなされたが、その内の6～7割が手根不安定症の症例であったのには驚いた。当初は検討内容が十分に理解できなかったが、次第にこの疾患の重要性と治療の難しさを理解するようになった。Mayo Clinicで指運動に関する実験研究を終了し、私はニューオリンズで開催された第49回アメリカ整形外科学会および第37回アメリカ手外科学会に出席して1982年1月31日無事に帰国した。



図1. Mayo Clinic手外科グループ症例検討会(1981年)。Dr. Dobyns：最前列に一人で座っている人。
 Dr. Linnscheid：右から4人目の白髪の人物。Dr. Wood：左から4人目の左手で持つ本を見ている人。
 上羽：左から6人目。Dr. Cooney：この写真を撮影していたので映っていない。

帰国早々に、当時の第25回日本手の外科学会会長 山内裕雄教授から突然の連絡があり、「今年5月に開催する日手会の翌日5月9日に卒後研修講演会で「手根不安定症」の教育講演をせよ」とのお達しを受けた。勿論、謹んで講演をお受けし、準備期間は僅かではあったが投稿原稿も急いで書き上げた²⁾。山内会長の素早い情報入手と迅速な処理に感服し、手根不安定症の重要性を十分に認識された見識の深さに感銘を受けた。

手根不安定症は関節リウマチや先天性靭帯弛緩などによっても発生しうるが、最も頻度が高いのはやはり外傷性手根靭帯断裂によるものであろう。外傷後の手根不安定症には靭帯だけが断裂して発生するものと、骨折を伴う靭帯断裂に起因するものがある。いずれにしても、手根靭帯の断裂が関与する。手根靭帯が断裂しても部分断裂であれば単なる捻挫として治療すれば治癒し、手術は不要である。しかし、靭帯の完全断裂後に発生する手根不安定症では保存治療を続けても症状は完治せず、手術を要する場合が多い。外傷後手根不安定症で最も多いのは舟状月状骨靭帯断裂による舟状月状骨解離(scapho-lunate dissociation)である。ここに提示する症例では、X線前後像に舟状骨と月状骨間に離解が認められ、掌側回転した舟状骨は短縮して見え、舟状骨遠位端にring signが現れている(図2)。だが、この静的(static) X線前後像だけで舟状月状骨靭帯の断裂による舟状月状骨解離だと即断してはならない。手を強く握り締めさせて動的(dynamic) 前後像を見れば、舟状骨・月状骨間距離は更に広がり、有頭骨々頭がその間に割り込みながら近位へ移動し、月状骨の尺側には月状三角骨解離、有頭有鉤骨解離が見られる(図3)。更に、造影剤を橈骨手根関節に注入して関節造影を行うと、造影剤は手根中央関節や手根中手関節にも流入した(図4)。



図2. 手根不安定症のX線前後像(static phase): 舟状月状骨離解が見られる。



図3. 手根不安定症のX線前後像(dynamic phase): 舟状月状骨離解と共に月状三角骨離解、有頭有鉤骨離解が見られる。



図4. 関節造影: 橈骨手根関節から手根中央関節、手根中手関節までの広範な造影剤の流入を認め、多数の靭帯が断裂していると考えられる。

つまり、この症例では舟状月状骨靭帯の断裂だけでなく、月状三角骨靭帯や有頭有鉤骨靭帯なども断裂していたのである。

手根不安定症の研究はその後急速に進んだが、二人の手外科医の名前を特記しておかねばならない。一人は手根靭帯を詳細に調査し、著書を出版したTaleinik Jであり³⁾、もう一人は強靭な関節包靭帯は(1) コラーゲン束collagen fascicle、(2) 靭帯周囲疎部epi-fascicular space、(3) 靭帯上膜epi-ligamentous sheathの3層構造を持つのを見出したBerger RAである⁴⁾。二人ともMayo Clinicで手外科を学び、長年にわたり手根不安定症の研究に多大な貢献をしたのである。我国の水関や堀井も手根靭帯に関する優れた研究を発表した^{5, 6)}。

21世紀に入り、手根不安定症の原因となる靭帯断裂の部位や程度を診断する技術は大きく進歩したが、治療法の進歩は非常に遅い。例えば、舟状月状骨靭帯の断裂を修復しても再断裂が起り、強固な靭帯再建を行うと舟状月状骨関節の可動性が失われるのが現状である。それ故、現在は靭帯再建術ばかりでなく、比較的容易な部分関節固定術や靭帯焼灼固定術なども用いられる。けれども、これらの手術で正常な手関節運動を復元させるのは極めて困難である。健全な靭帯と同様に、薄くて強い性状を持ち、しかも僅かな関節運動を許容する強く柔軟な靭帯の開発が望まれる。断裂した1本の靭帯を再建するのも難しい現状であるから、複数の手根靭帯再建は当然ながら極めて困難である。更に、陳旧性手根不安定症では靭帯の断裂部が癒痕化し、正常な靭帯組織と癒痕組織との識別ができない。今後、鏡視下手術の導入、人工靭帯の開発、靭帯と癒痕とが識別できる生体染色法などの研究が必要であろう。且つ、それらを駆使する繊細な技術の習得が不可欠である。現代社会においては繊細な手の機能回復が要求されるので、手根不安定症に対する有効な治療法が強く望まれる。我が国が誇る繊細な技術を用いて、今後はこの分野の発展にも多大の寄与ができるよう期待している。

参考文献

- 1) Linscheid RL, Dobyns JH et al: Traumatic instability of the wrist. J Bone Joint Surg 54-A:1612-1632,1972.
- 2) 上羽康夫:手根不安定症 (carpal instability) の診断と治療。整形外科33,1901-1906,1982.
- 3) Taleisnik J: The Wrist. Churchill-Livingstone Co., 1986.
- 4) Berger RA: The ligaments of the wrist. Hand Clinics 13:63-82,1997.
- 5) Mizuseki T, Ikuta Y: The dorsal carpal ligaments; Their anatomy and function. J Hand Surg 14-B, 91-98, 1989.
- 6) Horii E, Garcia-Elias M, An K-N et al: A kinematic study of lunotriquetral dissociations. J Hand Surg 16-A, 355-362, 1991.

医療倫理からみた医師の責務

梁 瀬 義 章

長吉総合病院 理事長

医の倫理に関しては、世界医師会 (WMA) でこれまでいくつかの宣言が出されている。その中で、昭和24年ロンドンでの第3回WMA総会で採択され、平成18年南アフリカでの総会まで3回の修正がされた、医の国際倫理綱領というのがある。これには医師の一般的義務と患者に対する義務、同僚医師に対する義務などが規定されている。

医師の一般的な義務として・医師は常に何者にも左右されることなく、その専門職としての判断を行い、専門職としての行為の最高の水準を維持しなければならない。

医師は判断能力を有する患者の、治療を受けるか拒否するかを決める権利を尊重しなければならない。・・・などと医師個人の倫理的な義務について書かれてある。

医師個人の責務として、①専門職としての行為の最高水準の維持をする。すなわち、高度の能力 (competence) が期待され、要求される。医学的知識や手術術式など発展し続けているため、医師となってもその能力の維持のために、日々研鑽しなければならない。②さらに患者に対して適切な医療を提供するためには、患者の苦痛や不安を理解し、その症状の原因を突き止め、苦痛を取り除く努力をしなければならない。

患者に自己決定させるためには、①患者の病名や症状 ②行う検査や治療の目的・内容 ③それにより予想される結果やそれに伴う危険性 ④予想される医療行為以外に方法があるか否か (治療法が3種類あればそれらすべてを説明) ⑤検査や治療を受けないことで起こりうる結果。などについて説明し、患者の理解をえることが大切である。骨折の患者に、いくら手術の絶対的適応がある骨折であっても、手術以外の治療法の有無、手術に伴う危険性について、十分な説明を行い、患者に了解を得てから手術を行うべきである。

しかし患者に自己決定させる際にも、患者は医学的説明を理解せず、ただ手術が嫌というだけで、保存的治療を選択し、結果として機能障害が残ると、医療サイドの責任を追究してくる。特に手の外科領域で問題となるのは、高齢者の橈骨遠位端骨折である。従来から高齢者の橈骨遠位端骨折変形治癒はある程度まで許容されてきた。医師も変形治癒による機能障害について十分に説明し、患者も納得しておればよいが、説明を聞き入れず、ただ手術が嫌として保存的治療を選択したのに、治癒後の機能障害によっては、後医を受診し、矯正骨切り術を勧められる。しかし、術後X線所見

で変形は矯正されていても、可動域制限や疼痛が遺残すると、初療医に最初の治療が不適切であったと文句を言ってくる事例が散見される。

治療開始時の十分な説明(既述)、説明内容の診療録への記載、適切な間隔での経過観察などを行い、保存的治療の途中で変形増悪し、機能障害が残ると思われる場合は、手術的治療の必要性などを説明しなおすべきである。

すなわち、患者の自己決定権は尊重しなければならないが、医師には専門職としての判断が求められていることを認識して、診療すべきかと思われる。

バトンリレー (第1回) : Paul Brand 先生の追憶

山内 裕雄

順天堂大学整形外科

本年4月に名古屋で開催された第60回日本手外科学会で、この節目の年を記念する講演を依頼され、過去を回顧する意味で、「巡り会えた手外科の巨人たち」というむかし噺をさせて頂いた。若いつもりで過ごしてきた私もいつしか85歳となり、50歳時に第25回本会を主催させて頂いたので、現存する最古(?)の会長経験者となってしまった。

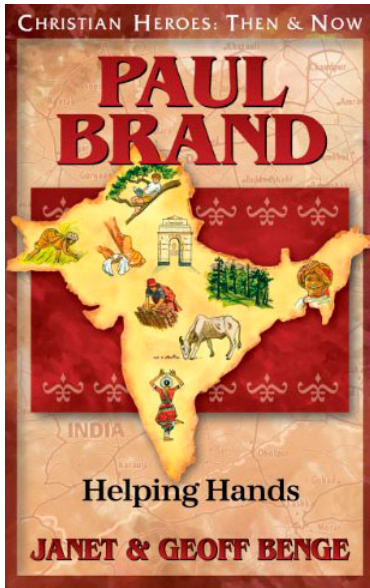
米国で設立された手外科学会から10年遅れて発足した日手会は初期の頃は他の学問分野と同じく輸入に大童であり、特に手外科の父とされるBunnell先生の高弟Boyes先生がたびたび来日、腱移行術の原則など素晴らしい講演をされた。その後まもなく、津下健哉・田島達也先生が優れた先達として日本の手外科を世界的レベルにされた。このお二人の素晴らしい指導者を得た私たちはまことに幸せであった。

私にとっては新潟で河野左宙教授のもとで行われた第4回日手会が初陣であった。それまで米国で初期外科系臨床研修をしていたので、英会話力が買われ、初めての試みであったBoyes先生が執刀、田島助教授が助手をされた手術を黑白テレビで講堂へ実況放映した際の同時通訳者として登場した。その後もそんな機会が多く、それが外国人学者との個人的付き合いの機会を拡げ、私の人生の幅を大きくしてくれた。まことに僥倖であった。

講演では、お世話になったSwansonをはじめとして多数の外国人手外科医を挙げたが、もっとも崇拝する、そして惚れ込んだPaul Brand先生について、本シリーズの冒頭を飾るにもふさわしい人と思うので、少し述べさせて頂く。彼は尺骨・正中神経麻痺によるわし手変形に対するfour tailed tendon graftで有名であるが、これはleprosy handに対しての工夫であり、彼はインドでらい患者に接し、手指・足趾の変形予防・治療に一生を捧げた人であった。

私が初めてお目にかかったのは2度目の渡米中、1967年、ミシガン州Grand Rapidsだった。そこの整形外科医会で、彼は麻痺手再建を映画も使って講演された。小皮切から腱鉗子をたくみに使った腱移行術、そしてらい手変形の予防・治療に及ぶ見事なもので、彼の美しいBritish Englishにも魅せられた。その晩、今度は1時間離れたとなり町の教会でインドでの話をされるといので車を飛ばした。それはそれは感激的な講話だった。





彼のご両親はインドで伝道医として活躍され、Paulはそこで生まれ、少年時代を過ごしたが、学齢期に達すると、二人の叔母の手に委ねられ、イギリスで教育を受けた。これ以降の話は伝記作者Janet and Geoff BengelによるPAUL BRAND - Helping Hands, YWAM Pub. Seattleを参考にした(本書はアマゾンでpaul brandと入れれば出てくるが和訳はない)。大学では、はじめ建築を専攻したが医学部に転じ、外科医となり、インドの伝道団体からの要望で兵役を免除され、インド南東部のVelloreにあるleprosarium勤務となった。そこで見たのは悲惨な患者の病態・環境だった。手指・足趾亡失の原因は末梢神経変性による知覚脱失によるもので、時には就寝中に鼠に食いぢぎられたのに気がつかなかったという実態もあり、知覚鈍麻・脱出による組織損傷をいかに防ぐかの研究を精力的・科学的に行った。

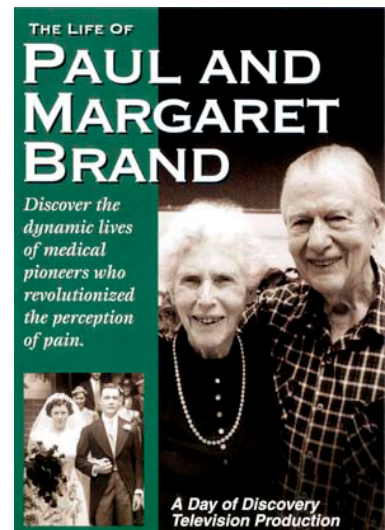
この研究成果は国際的にも高く評価され、幾多の賞・称号も授与された。医学部時代に同級だったMargaret夫人も一緒に赴任、眼科医としてらいによる視力障害の大家となった。

しかし6人のお子様ごの教育もあり、インドを引き揚げ、研究が継続できる可能性を求めて、イギリスではなく、アメリカ・ルイジアナ州の広大な林の中、Carvilleにある米国公衆衛生院所属leprosariumのリハビリテーション部長・研究所長として赴任した。そこでの色素入りマイクロカプセルを利用した手袋や靴下によって手足の異常圧迫部位を検出し、圧迫障害を予防する研究(JBJS 51-A, 109-116,1969)に私は大いに刺激された。彼は1986年東京で開催された第3回IFSSH大会でPioneer of Hand Surgeryとしても表彰されている。私はミシシッピー川のほとりにあるCarvilleを2回訪れた。旧くて質素な官舎や研究室で彼の嚆矢・温顔に接し得たことは、私一生の宝・思い出である。世の中には「神の手」といわれて得々としている外科医がいるようだが、Brand先生は「いやいや私は神の僕(しもべ)に過ぎなかった」とおっしゃることであろう。

こんな素晴らしい人が手外科医にいらした。ということが私の医師生活での大きな励みになった。2003年に転倒、頭蓋内出血の術後、88年の人生を閉じられたPaul Brand先生に心からの感謝と哀悼の意を捧げたい。先生の人生そのものが類い稀な芸術であった。

追記

最後の写真はThe life of Paul and Margaret Brandと題したお二人の生涯を描いたテレビ番組DVDのカバーで、結婚時と晩年の仲睦まじい夫妻の姿がある。アマゾン書店のリストにはあるが残念ながら売り切れとのこと、私も観ていない。



第27回手外科医親睦テニス大会

(2017年4月29日開催)

田 中 利 和

キッコーマン病院

『ナイスショット!!』

『ごめんごめん、失敗した。今で、足がつりそうや。』

『この前よりもよくなっているン違う?』

にぎやかな会話が行きかうテニスコートでは、年齢に関係なく、テニスを楽しむ声が聞こえます。周囲は緑に囲まれ、空はどこまでも高く、風もなく、絶好のテニス日和です。

名古屋での第60回手外科学会を終了後、皆で一献傾けての前夜祭、日に焼けた顔、昨年の失敗談、リベンジをかけた挑戦状等、みな明日のテニス大会のことで、目はキラキラしています。朝7時30分にホテルを出発し、逸る気持ちを抑えつつ、東山運動公園テニスコートに26人が勢ぞろいです。すでにこの会も27回を迎えています。参加資格は45歳以上でテニスがうますぎる人はダメだそうです。現役教授はもちろん、教授経験者、学会会長経験者も複数おり、最高齢は82歳(80代2名)です。皆、無心にボールを追っています。そして、ただ『楽しい』それだけです。ポイント制で、合計4試合をやりました。今回の優勝者は開催地の名古屋日赤の堀井先生でした。終了後の反省会で、会長の麻生先生から表彰状が送られました。

今回は、名古屋大学、名古屋市立大学の若手の先生方に大変お世話になりました。この場を借りて、お礼申し上げます。来年の第61回は昭和大学稲垣教授の開催で、有明テニスの森での開催もうわさされています。また1年、腕を磨いて集まるのが楽しみになっています。『待っているよ、来年は必ず勝つぞ!!』そんな笑顔いっぱいの会話で盛り上がる解散風景でした。



関連学会・研究会のお知らせ

◆第26回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成29年10月19日(木)～20日(金)
会 場：ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター
会 長：磯貝 典孝(近畿大学医学部形成外科学講座)
詳 細：<http://jsprs26.sakura.ne.jp/>

.....

◆第32回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成29年10月26日(木)～27日(金)
会 場：沖縄コンベンションセンター
会 長：金谷 文則(琉球大学大学院医学研究科 整形外科学講座)
詳 細：<http://www2.convention.co.jp/joakiso2017/>

.....

◆第44回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：平成29年12月7日(木)～8日(金)
会 場：シーガイアコンベンションセンター
会 長：多久嶋 亮彦(杏林大学医学部形成外科学)
詳 細：<http://jsrm44.umin.jp/>

.....

◆第28回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：平成29年12月7日(木)～8日(金)
会 場：京王プラザホテル
会 長：高山 真一郎(国立研究開発法人国立成育医療センター 臓器・運動器病態外科部)
詳 細：<http://jpoa2017.jp/>

.....

◆第35回中部日本手外科研究会◆

会 期：平成30年1月27日(土)
会 場：ウインクあいち(愛知県名古屋市)
会 長：鈴木 克侍(藤田保健衛生大学医学部整形外科)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/jssh35chubu/index.html>

.....

◆第32回東日本手外科研究会◆

会 期：平成30年2月3日(土)
会 場：伊藤国際学術研究センター(東京大学構内)
会 長：三上 容司(横浜労災病院 整形外科)

◆第39回九州手外科研究会◆

会 期：平成30年2月3日(土)
会 場：福岡国際会議場
会 長：岡田 貴充(九州大学整形外科)

.....

◆第30回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：平成30年2月16日(金)～17日(土)
会 場：東京プリンスホテル
会 長：長岡 正宏(日本大学病院長・整形外科)
詳 細：<http://elbow2018.umin.jp/>

.....

◆第61回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：平成30年4月11日(水)～13日(金)
会 場：ホテルニューオータニ博多・電気ビル 共創館
会 長：清川 兼輔(久留米大学医学部形成外科・顎顔面外科学講座)
詳 細：<http://www.c-linkage.co.jp/jsprs61/>

.....

◆第30回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：平成30年4月28日(土)～29日(日)
会 場：ソラシティカンファレンスセンター
会 長：斎藤 和夫(瀨野辺総合病院 リハビリテーション室)
詳 細：<http://meeting30.jhts-web.org/>

.....

◆第91回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：平成30年5月24日(木)～27日(日)
会 場：神戸コンベンションセンター(神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場)
会 長：遠藤 直人(新潟大学大学院医歯学総合研究科機能再建医学講座 整形外科学分野)
詳 細：<http://www.joa2018.jp>

.....

◆第29回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：平成30年9月7日(金)～8日(土)
会 場：下関海峡メッセ
会 長：神田 隆(山口大学 神経内科)

編集後記

猛暑の夏がやっと終わりを告げようとする中、日手会ニュース第48号をお届けします。本号も多くの原稿をいただき、読み応えのある内容となっています。

上羽先生の今回のテーマは手根不安定症です。確かに以前には、“Mayo’s disease”と揶揄された発言を学会で聞いたことがあります。日本人には人種的に少ないのかも知れませんが、見逃されてきた例も多々あることでしょう。梁瀬先生は、今回も重要な問題について言及されています。私は先生が委員長を務める大阪府医師会医事紛争対策委員会に所属していますが、紛争の原因の多くはやはり説明不足です。近年、弁護士数が増えたせいか、仕事を求めるあまり、かなり無理のある訴訟を起こしている例を散見します。くれぐれも説明内容の診療録への記載を怠らないようにして下さい。

今回から「バトンリレー」という企画が始まりました。65歳以上の先生方にエッセイを書いていただくというもので、執筆された先生には次号の執筆者を指名していただきます。第1回は山内裕雄先生による「Paul Brand先生の追憶」です。ところでBrand先生には“Clinical Mechanics of the Hand”という名著がありますが、この第3版は1999年に出版され今は絶版です。6-7年前に私はこの本を手に入れたかったので、アマゾンで検索すると10万円以上のプレミアム価格がついていました。さすがに手が届きませんでした。諦めきれず何度も検索していたところ、あるとき2万円の古書が売りに出され、即座に購入しました。送られてきた本は非常にきれいに取り扱われており、巻末には33年前の研修医のときにお世話になったリハビリテーション科K部長(故人)の署名がありました。ご家族が遺品を処分されたものと思います。厳しい先生で、手術だけやりっぱなしで成績不良例をリハビリに丸投げする整形外科医を常々批判されていました。この記事を読んで、そのことを思い出しました。K部長の言葉をもう一度噛み締めると共に、論文に必要な部分だけ読んで、あとは「積ん読」になっていたその教科書を改めて読み直す気になりました。

さて、いよいよ学問の秋です。第61回学術集会の演題募集の締め切りも目前に迫っています。多くの素晴らしい研究が実を結ぶことを願っています。

(文責：日高典昭)

広報渉外委員会

(担当理事：平瀬雄一、委員長：白井久也)

委員：磯貝典孝、岡崎真人、佐竹寛史、辻 英樹、日高典昭)